



漢詩を味わう

第89回

汾上驚秋 ふんじょうにてあきにおどろく 蘇頌 そてい

北風吹白雲 北風 白雲を吹く

萬里渡河汾 万里 河汾を渡る

心緒逢搖落 心緒 搖落に逢い

秋聲不可聞 秋声 聞くべからず

北風が白い雲を吹き流している。

遠い旅の道すがら汾水を渡る。

私の心は木の葉の舞い散る眺めに出会い、

秋の物音を耳にするのも耐え難い。

《汾上》 汾河のほとり。汾河は山西省を南西に流れて黄河に注ぐ川。

《心緒》 心もち。情緒。

《搖落》 揺れ散る。草や木の葉が落ちること。

《秋聲》 秋に自然に発する音。風の音や木の葉の落ちる音や虫の音。

蘇頌は陝西省武功県の名家の出身で盛唐時代に活躍した詩人です。高宗の時代に進士となり、玄宗に愛されて工部侍郎から中書侍郎に昇進し、四十六歳で宰相まで登りつめて玄宗を補佐しました。晩年には李白と逢い、その文才を前漢の司馬相如になぞらえて称賛されたということです。

蘇頌は長旅を続けていたのでしょう。この詩は都から北へ旅して汾河を渡ったときに作った詩です。いつの間にか秋を迎えてしまった悲しみを詠じています。詩題の「秋に驚く」というのは、びっくりしたということではなく、感じやすくなっている心が、わずかなことにもハッとふるえることを言っています。前半は秋風のなか、流れる雲を見ながら川を渡るわが身を描写します。後半の「心緒」の緒は糸ぐちの意味で心の糸口、端っこです。糸の端はほつれやすく、いちばんばらばらになりやすい部分です。人の心もそんな風で、心の端っこが外界と接して、そこでものごとを感じます。その感じやすい心緒が、「秋の景色を見るだけでも悲しいのに、さびしい風の音や木の葉の落ちる音まで加わってとても耐えられない」と、きわめて繊細な心情が示されています。

この詩は漢の武帝が作った「秋風の辞」を素地にしています。武帝は秋の日にこの汾河に舟を浮かべて遊び「秋風起って白雲飛び、草木黄ばみ落ちて雁南に帰る……歎楽極まりて哀情多し……」とうたいました。中国の詩人たちが汾河というところの詩を思い浮かべるように蘇頌もこの詩を思い起こしながら、その上に新しい感覚を詠み込んだ詩です。

参考文献・漢詩の辞典(大修館書店)・唐詩鑑賞辞典(東京堂出版)・唐詩選(岩波文庫)

星河動かず天水の如く 風露聲無く月楼に満つ

星河動かず天水の如く 風露聲無く月楼に満つ

《大意》天の川は流れぬが天は水のように静かでひややかに、吹く風に降りる露には声なく月色は楼一杯にさしている。(陳安)

吾が心は秤の如く、人の為に軽重を作さず。

吾心如秤不  
為人作輕重

《大意》自分の心は秤のように正直であるから、人のために軽くなり重くなることはなく、常に公平である。(諸葛亮)

吾心如秤不  
為人作輕重

高 齊 聞  
鴈 来

読み 高齋鴈の来るを聞く(高殿の官舎にいて雁の鳴きわたる声を聴く(韋応物詩句))

佐藤象雲書



今月は「雁」以外は左右均斉の取れたいわゆるシンメトリーの字だが、どの画とが照応しあっているか考えること。  
第七画と第八画左右の角度に注意

鳥をすっきりと纏めたい。

X — アキを等しく

第四画は右上がりにして長すぎぬよう

縦画は背勢に



一般部規定課題出品について  
規定課題は段級の区別なく、右掲載の五字句となります。  
初段以下の方に限り、左に掲載してあるように二文字または三文字でも構いません。  
規定課題(楷書)の出品はひとり一点に限ります。

草書

行書

高齋聞 鷹來

高齋聞 鷹來

※成家・師範の随意作品出品は一点までです。

次号課題

隸書

出藍而 更青

高齋聞 鷹來

◇各体とも書風は自由です。特に上位者は古典などを参考に創意溢れる作品をご出品ください。

(両部とも本会所定の指定用紙を使用のこと)

支 部	
順 位	
氏 名	

鹿の鳴く音に目をさす

山里は秋こそよにわびけれ

古今和歌集 壬生 忠岑 和泉 溪石 先生書

空谷傳聲 虚堂習聽  
 空谷傳聲 虚堂習聽  
 空谷傳聲 虚堂習聽

佐藤象雲書

音

クウコクデンセイ  
キョドウシユウチヨウ

略解

谷の中で声を発すればこだまとなって伝わる  
 広い堂の中で声を出せば響いて答える声があるようだ

言未馳而

言未だ馳せずして……

■ 褚遂良・雁塔聖教序

(初唐・西暦六五三年) の臨書 (32)

象雲臨

言未馳而

『言未馳而』

楷書の基本的な形のまとめ方に間架結構法というものがあります。「同じ方向の点画は揃える」とか「点画の入り組み具合を過不足なく整える」などのいわゆる分間布白とか均間という法則です。雁塔聖教序は、一見この基本に則っているようでありながら、実は変化を求めて線に微妙な動きが見られます。

「言」雁塔には横画を極端に細く長い線が散見される。起筆は逆筆のいわゆる藏鋒を多用しているが、この横画は起筆の打ち込みを強くして、一本の線に緩急の変化が見てとれる。短い二横画の変化も見逃さないよう。

「未」二本目に横画の収筆に注意。

「馳」引き締まっていながら、空間に余裕が感じられる。

「而」縦の分間は均等ではなく長さにも変化がある。

安云物に殊

安云く、物論殊に（爾らずと。）

■孫過庭・書譜（初唐・西暦六八七年）の臨書（14）

象雲臨

『安云物論殊』

宋の米芾は「過庭の草書書譜、甚だ右軍の法有り。字を作るに落脚やや前に近くして直なるは、二王の小しく異なれり。此れ過庭の法なり。凡そ右軍の書と称して此れ等の字有るは皆な孫が筆なり。」と述べています。孫過庭の書はまさしく王羲之の書法であると同時に、王羲之の書との相違点を述べています。「落脚やや前に近くして直なる」という文言の解釈は少々難解ですが、筆をしっかりと押さえ筆鋒を立てて筆を抜き放つ。という意味のようです。今月の五文字は線の太細に加え大小の変化があり、筆先は破綻することなく次の字へと進んでいきます。穂先が開いてもまた細線で孤を描いている最後の「殊」などを見ても、直筆を基本として連筆していることがよく理解できると思います。

安云物に殊